

No_9 (2002,2,15) Defining a Dose-Response Relationship with Radiotherapy for Prostate Cancer: Is More Really Better?

Vicini FA, et al:

Int J Radiat Oncol Biol Phys:51:1200-1208, 2001

限局した前立腺癌に対する放射線治療の線量効果関係の存在を明らかにするため、放射線の線量と治療成績の関係を論じたデータをレビューした。MEDLINE、CancerLit 及び関連する論文のリストから論文を選択した。論文のクオリティに問題のあるものもあるが、合計 11297 例を扱った 22 のトライアル(うちランダム比較試験は 2 つのみ)が選ばれ、解析された。線量と局所制御の関係は扱っている 11 編の論文のうち 9 編で、線量と生化学的制御は 12 編のうちすべてで、線量と病理学的制御は 4 編のうち 2 編で、線量と原病生存率は 9 編のうち 3 編で各々線量効果関係が認められた。予後不良群の患者が各エンドポイントについて線量増加の恩恵を受けている傾向がみられた。しかし、至適線量と線量増加による成績向上の大きさについては、はっきりしなかった。結論として放射線の総線量は治療成績と関連するように見えるが、この問題を論じている客観的で質の高いデータは欠如している。現在のところ、線量増加による絶対値としての治療成績の向上、線量増加により最も利益を受ける患者群、そして至適な線量についてはまだ明らかになっていない。

筆者らは、殆どの論文で線量増加群の経過観察期間の方が短く、再発率の過小評価が起こる可能性があるため、予後因子により層別化された形での大規模なランダム比較試験が必要であるとしている。また内分泌療法の併用により、線量増加が必要でない可能性もあるとしている。最後に線量を増加させると、それに伴って直腸や膀胱などの正常組織の障害も頻度が増すため、これが技術的に解決されるまでは線量増加は注意して行うべきである、と結んでいる。(唐澤克之)

No_10 (2002,2,22) Chemoradiotherapy after Surgery Compared with Surgery Alone for Adenocarcinoma of the Stomach or Gastroesophageal Junction.

Macdonald JS et al.

New England Journal of Medicine 245(10): 725-730, 2001.

近年 chemoradiation は頭頸部癌、子宮頸癌、肺癌等多くの癌治療において良好な結果を得ている。この報告は SWOG が、胃癌に対する術後 chemoradiation の効果について、他施設 RCT を行った結果報告である。対象は stage IB-IV の局所に限局した胃癌である。対象を(1)手術のみを施行した群と、(2)術後に 5-FU とロイコボリン、放射線治療を 45Gy (1.8Gy×25 回)施行した群に分け比較している。その結果、

chemoradiation 群は手術単独群に比べて、有意に生存率、無病生存期間の点で良好な結果が得られた。しかし日本における胃癌の治療成績と比較して、欧米のそれは著しく低い。手術方法においても議論の多いところである。そのためこの結果をそのまま日本の胃癌治療に適応することには疑問が残る。しかし、胃癌は放射線治療が効きづらいとされてきた概念を覆すもので、胃癌の放射線治療を再検討する必要があると思われる。今後日本においても進行胃癌における術後 chemoradiation の適応について検討されるべきであると思われる。(川口 修)